

## 活動と資料

# サービス付き高齢者向け住宅に入居する高齢者の支援ニーズに関するスコーピングレビュー



森本 安紀, 新井香奈子  
滋賀県立大学人間看護部

**要旨** 日本のサービス付き高齢者向け住宅(以下サ高住とする)は, 2011年に新たに創設された「住まい」のサービスである。自立から介護が必要な高齢者まで, 幅広い対象者が, 自分に合った住まいとしてサ高住を選択できる。そこで, 本研究は, サ高住に入居する高齢者の支援ニーズについて明らかにすることを目的とし, スコーピングレビューにて文献検討を行った。対象とする文献は高齢者の支援ニーズについて記述のある原著論文とした。スクリーニングを行い, 25件を採択した。その結果から, サ高住に入居する高齢者には【最期までサ高住で過ごしたい】【新たな生活の場でも自分らしくいたい】【今までの生活を取り戻したい】【食事や栄養に関する心配事・困りごとを解決したい】【自分の意思で選択しながら自由に暮らしたい】【親子で安心した生活を送りたい】という支援ニーズがあった。この支援ニーズの構成要素として, まず「高齢者が持つ要素」があった。これを支援するために「関連する専門職」や「家族」という要素が関わっていた。住まいを替えた高齢者にとって, 新たな役割の獲得, 活動性の維持・向上が, 自分らしい生活の継続につながっていた。

**キーワード** サービス付き高齢者向け住宅, 高齢者, 支援ニーズ, 多職種連携

## I. 背景

わが国が超高齢社会をむかえ, 高齢者が安心して地域で暮らせる住まいの需要が高まっている。そこで, 2011年に「高齢者の居住の安定確保に関する法律(高齢者住まい法)」(国土交通省)を改正し, サービス付き高齢者向け住宅(以下サ高住とする)が創設された。それまであった有料老人ホーム・軽費老人ホームにサ高住を加えて「高齢者向け住宅」として, 民間資本のサービスの拡充がはかられた。その結果, 高齢者向け住宅の利用者は2011年の541,472床から2017年の859,594床(厚生労働省, 2020)へと増加した。

サ高住とは, 高齢者にふさわしいハードとしてのバリアフリー構造や一定の面積, 設備と, 安心できる見守りサービスとしてケアの専門家による安否確認サービスと, 生活相談サービスを設置基準として定められた「住まい」である。また, 厚生労働省が定める「特定施設」として, ①食事の提供, ②介護の提供, ③家事の供与, ④の健康管理の供与という有料老人ホームと同じサービスを受けることができる。このため, 自立度の高い高齢者から介護が必要な高齢者まで幅広く対応できるサ高住は, 民間資本の特色を活かした地域包括ケアシステムを

推進する新たな「住まい」として注目されている。しかし, 今までの研究・調査では, 「高齢者向け住宅」を対象としているものが多く, サ高住のみを対象とした研究はまだ少ない。そこで, 本研究では, サ高住を選択した高齢者が求める支援ニーズとそれを構成する要素について明らかにし, サ高住で高齢者が住み続けるための示唆を得たい。

Support needs of elderly residents in 'Elderly housing with care services' in Japan : a scoping review

Aki Morimoto, Kanako Arai

School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

2022年9月30日受付, 2023年1月16日受理

連絡先: 森本 安紀

滋賀県立大学人間看護学部

住 所: 彦根市八坂町 2500

電 話: 0749-28-8638

F A X : 0749-28-9507

E-mail : morimoto.a@nurse.usp.ac.jp

## II. 目的

サ高住に入居する高齢者の支援ニーズとその構成要素について明らかにする。

## III. 方法

本研究は、既存の知見を網羅的にマッピングおよび整理することで、まだ研究されていない範囲を特定することを目的とするスクーピングレビュー (Arksey & O'Mally, 2005; 友利, 沢田, 大野, 高橋, 沖田, 2020) の手法を用いて行った。

### 1. 対象論文の採用プロセス

選定は文献レビューの経験のある研究者1名を含めた2名で行った。論文検索の対象期間はサ高住が創設された2011年以降とした。本研究では入居している高齢者の支援ニーズを明らかにすることを目的としているため、主となる研究者の職種は問わずに原著論文に限定して、医学中央雑誌 Web と CiNii Research で検索した。特定された57件とハンドサーチで該当した1件を加えた58件のうち、重複している1件の論文を除外した。次にタイトルと要旨から、サ高住の建築基準に関することや対象にサ高住以外が含まれている30件を除外した。次に論文の内容から「高齢者自身が抱えるニーズ」と「支援者が考える高齢者への支援ニーズ」の両者の視点で、高齢者の支援ニーズに関わる記載があるかの確性を確認し、2件を除外した。その結果、25件を採用とした(図1)。

### 2. 分析方法

分析は、質的研究の経験のある研究者2名で行った。それぞれの論文の研究結果からサ高住に入居する高齢者の支援ニーズとして、①サ高住での生活や支援に対する高齢者自身の思いが抽出されている記述、②サ高住で何らかの支援に当たる人が高齢者の思いを汲み取って行っていた支援に関連する記述をコード化し、サ高住に入居する高齢者の支援ニーズの 카테고리を生成した。その後、それぞれのカテゴリに対応するコードから構成要素を抽出した。本文中ではカテゴリ名は【 】, コードは〈 〉で表記する。

## 3. 用語の定義

支援ニーズの構成要素：本研究では高齢者がサ高住で生活する中で生じるニーズを支援ニーズと定める。そして、構成とは「いくつかの要素を一つのまとまりのあるものに組み立てること(広辞苑)」、要素とは「ある物事を成り立たせている基本的な内容や条件(広辞苑)」である。このため、支援ニーズに関連する構成要素とは、高齢者の思い、実際の支援、それを実行するための職種や環境を含めたものとする。

高齢者の持つ要素：高齢者自身がサ高住で生活するために関連する思いや身体および環境につながる条件

## 4. 倫理的配慮

論文の取り扱いは、著作権を侵害しないように配慮し、コード化については原論文の内容や意図を損なわないようにした。

## III. 結果

分析の結果、サ高住に入居する高齢者(以下入居者とする)の、【最期までサ高住で過ごしたい】【新たな生活の場でも自分らしくいたい】【今までの生活を取り戻したい】【食事や栄養に関する心配事・困りごとを解決したい】【自分の意思で選択しながら自由に暮らしたい】【親子で安心した生活を送りたい】という6つのカテゴリが抽出された(表1)。以下、それぞれのカテゴリと

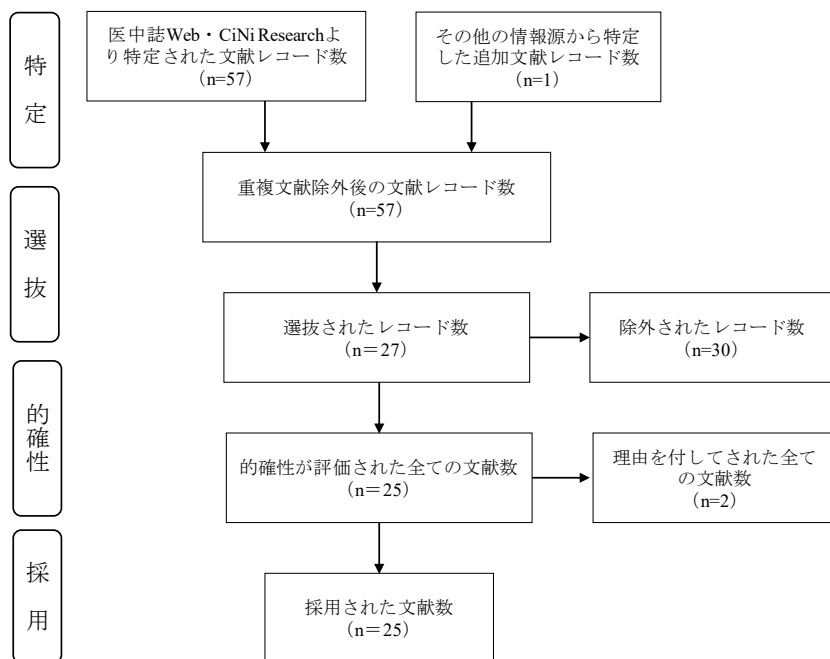


図1 文献の採用までのフローチャート

表1 サービス付き高齢者向け住宅に入居する高齢者の支援ニーズ

カテゴリー	コード	筆頭著者名(年)	
<p>最期までサ高住で過ごしたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問看護師は、訪問看護開始後の間もないタイミング、入退院のタイミング、状態が悪化したタイミング、医療・ケア・療養場所の変更のタイミング、末期がん診療後の方針を決めるタイミング、必要性を捉えたタイミング、最期が近づいたタイミングで話し合いを捉えていた。</li> <li>・訪問看護師はサ高住という家族が身近にいない環境で療養者の意思を的確に汲み取り、話し合いにおける療養者の推定意思の合意に寄与していた。</li> </ul>	<p>山路(2021)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護職員は、“自宅での看取り”を管理者と共に追及していた。</li> <li>・介護職員は、入居から最期まで自宅として自由に生活してもらうことが入居者や家族の看取りの満足につながっていると捉えていた。</li> <li>・介護職員は、入居者に対し、希望を定期的に聞くことで死を意識させないように、普段の生活における入居者の言動から希望を把握していた。</li> <li>・介護職員は、入居者に最期まで“一人じゃない”と思える人とのつながりを維持・創出していた。</li> </ul>	<p>杉本(2021)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サ高住では、入居者にもしもの時に意思決定を任せたい人の確認、病気が悪くなった時救急車を呼ぶかの確認を行っていた。</li> <li>・看取りを受け入れているサ高住は今の症状を伝えること、延命治療や口から食べられなくなった時の医療の確認をしていた。</li> </ul>	<p>戸谷(2020)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サ高住に勤務する介護責任者及びケアマネジャーは、入居者の思いや看取りに向けた考えの把握をしていた。</li> </ul>	<p>佐々木(2019)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・外来看護師は、何かあれば訪問診療、訪看と連携し、急変時に救急車を呼ばないことを職員へ周知するよう働きかけていた。</li> <li>・介護職員やケアマネジャーはサービス提供時間以外にもコミュニケーションを多く取るようにしていた。</li> <li>・介護職員やケアマネジャーは、知り得た情報を外来看護師にも伝えていた。</li> </ul>	<p>橋野(2018)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・看取りには地域の医療機関の医師からのサービス提供が施設での看取りに大きな影響を与えていた</li> <li>・開設経過年数が長く居住者数が多い施設ほど看取りのノウハウを持っている。</li> </ul>	<p>Sugimoto(2017)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・介護職員は、看取りの希望に応えたいと思いつつも、不足している知識・技術や心理的負担から看取りに消極的になっていた。</li> </ul>	<p>佐々木(2016)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者は、サ高住に対して最後の看取りの場所や動けなくなった時の介護の場所と考えていた。</li> <li>・入居者は、家のような自由で安全・安心な環境を期待してサ高住へ入居していた。</li> <li>・入居者は、家族との現実に向き合い、扶養意識の社会的変化を受け入れてサ高住で生きる覚悟を決めていた。</li> <li>・入居者は、家を売却することや従来人間関係を断ち切ることでこれまでの生活に決別していた。</li> </ul>	<p>原谷(2016)</p>	
	<p>新たな生活の場でも自分らしくいたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者は、住み慣れた自宅で生活したい、自宅の整理をして子どもたちに迷惑をかけたくないという思いがあった。</li> <li>・生活の場であるサ高住での訪リハを行ったことにより入居者の動作の自立につながった。</li> <li>・サ高住職員が作業療法士と注意点を共有したことで生活場面で実施でき、外泊時の入浴、家事の獲得につながった</li> <li>・家族に外泊の協力を得ることができ、一人での定期的な外泊が可能になった。</li> </ul>	<p>今井(2020)</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・サ高住では、入居に際して履物を新しく購入せず、慣れた自宅で使用していた物を持参する人が多い。</li> </ul>	<p>東海林(2020)</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者は、施設内を歩けるようになりたい、他の入居者とお話がしたいと希望していた。</li> <li>・入居者は、趣味活動の再開やレクや手芸教室で指導者として教える役割を獲得したことで、サ高住での生活スタイルが変化し、意欲的になり他者との交流機会が増えた。</li> </ul>		<p>五十嵐(2019)</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者は、みんなに支えられて生きていると感じ、自分の命が残り少ないと感じるなか、いまを一生懸命に生きていこうとしていた。</li> <li>・入居者は、自立して生きていきたいと感じており、サ高住で一人暮らしの身の安全と健康への安心の確保を考えていた。</li> <li>・入居者は、これまでの人生経験が今の自分の支えになっていると感じ、他者のために今の自分にできることがしたいと思っていた。</li> </ul>		<p>伊藤(2018)</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者は、医療との連携を感じることで看護師に親密さを感じ安心を得ていた</li> </ul>		<p>菊地(2016)</p>	
<p>今までの生活を取り戻したい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入院した入居者は、サ高住の生活を想定した歩行訓練、退院に向けての不安の解消と、サ高住のケアマネ、スタッフとの情報共有と支援の助言を行うことで退院後スムーズにサ高住での生活へ移行できた。</li> <li>・退院後のサ高住への入居には、家族の介護協力が関係している。</li> <li>・自宅と比較してサ高住に退所した利用者の方が移動能力が高い。</li> </ul>	<p>中村(2022)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・必ずしも施設に入所したことによる環境の変化がQOLを低下させる要因ではない。</li> <li>・下肢の機能低下はADLを制限し、QOLを低下させることが示唆された。</li> <li>・自立度が高い入居者ほどQOLも高い。</li> </ul>	<p>加藤(2018)</p>	
	<p>食事や栄養に関する心配事・困りごとを解決したい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者は、妻と同じ施設で過ごしたいと思い、寝たきりにはなりたくないと思っていた。</li> <li>・薬剤師は、飲み薬を増やさずに食欲を改善できる調剤薬を医師に提案し、入居者の希望を叶えようとしていた。</li> <li>・管理栄養士は、入居者の毎日の食事で栄養改善を図るとともに、入居者が興味を持つように故郷の名物料理も取り入れて、家族ごとを楽しみ、食事を楽しむ時間を作っていた。</li> </ul>	<p>阿部(2019)</p>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・食事を提供している施設がほとんどである。</li> <li>・食事提供を行う場所は食堂が最も多く、ついで居住部分である。</li> <li>・サ高住の介護度の低い入居者でも、咬合支持が回復すれば、通常の食事を摂取することができた。嚥下ではなく咀嚼が障害されている場合は、刻んだ食べ物が必要だった。</li> </ul>	<p>細山田(2018)</p>
<p>自分の意思で選択しながら自由に暮らしたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者は、過去の家族との思い出や習い事にまつわる記憶に基づいた香りや好きな飲食物の香りを好んだ。</li> <li>・入居者は嗅覚の衰えを感じつつも、日常生活において香りを楽しんでおり、その香りによってリラックス効果と食欲が引き出されていた。</li> </ul>	<p>Tanaka(2015)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・サ高住に住み替えた理由については、安心を得るという基本的な欲求だけでなく、「自然の中で暮らしたい」「趣味や生きがい」を大事にしたいなどの自己実現欲求があることがわかった。</li> <li>・以前の住宅に比べて、現在住んでいるサ高住向け住宅の方が、付き合う相手がいる、相互扶助的な行為があるという回答の比率が高くなっていた。</li> </ul>	<p>藤原(2021)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居している人の多くが住み慣れた地域に住み続けたい、また医療・介護の安心を求めている。</li> <li>・近隣に住む家族の呼び寄せや他の福祉施設に入居するにはまだ早いという人が入居していた。</li> <li>・近隣には商業施設が多いことから自由な生活スタイルを望む方が多かった。</li> </ul>	<p>馬場(2020)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者が、住み替えた理由については、「住宅に共感した」「安心である」「身体能力が低下したから」だった。</li> <li>・入居者は、住宅内でのコミュニケーションは保たれていたが、地域住民とのコミュニケーションがとれていなかった。</li> <li>・入居者が不安に思うこととして、住宅設備や生活のサポート、緊急時の対応があった。</li> </ul>	<p>佐藤(2016)</p>	
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入居者が、住み替えた理由については、「住宅に共感した」「安心である」「身体能力が低下したから」だった。</li> <li>・入居者は、住宅内でのコミュニケーションは保たれていたが、地域住民とのコミュニケーションがとれていなかった。</li> <li>・入居者が不安に思うこととして、住宅設備や生活のサポート、緊急時の対応があった。</li> </ul>	<p>馬場(2016)</p>	
<p>親子で安心した生活を送りたい</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住み慣れた地域で暮らしを継続するために親子でサ高住への入居することが高齢なため介護に不安を抱える母親への支援となった。</li> <li>・一緒に入居する母親の不安への支援が必要だった。</li> </ul>	<p>富田(2022)</p>	

その構成要素について説明する。

### 1. 【最期までサ高住で過ごしたい】

〈入居者は、サ高住に対して最後の看取りの場所や助けなくなった時の介護の場所と考えていた〉というように、サ高住を終の住処として捉えていた。このために、〈入居者は、家を売却することや従来の人間関係を断ち切ることでこれまでの生活に決別していた〉(原谷, 佐々木, 2016)。入居者を日常的に支援する介護職員は、入居者の思いを理解し、看取りに関わることを推測していた(原谷ら, 2016; 佐々木, 原谷, 2016; 佐々木, 合田, 高橋, 2019; 杉本, 柏木, 2021; 戸谷, 梨木, 吉田, 内田, 2020)。そして、訪問看護師や外来看護師が関わることで、入居者の意思決定支援につながり(山路, 飯田, 齋藤, 2021; 橋野, 2018)、教育的関わりができたことで、〈介護職員やケアマネジャーはサービス提供時間以外にもコミュニケーションを多く取るようにしていた〉(橋野, 2018)。また、サ高住での看取りを行うためには、地域の医療機関の連携とサ高住の開設経過年数の影響があった(Sugimoto, Ogata, Kashiwagi, Ueno, Yumoto, Yonekura, 2021)。

そして、〈介護職員は、入居者に最期まで“一人じゃない”と思える人とのつながりを維持・創出していた〉り、〈介護職員は、入居者に対し、希望を定期的に聞くことで死を意識させないように、普段の生活における入居者の言動から希望を把握していた〉(杉本ら, 2021)。

このカテゴリーの構成要素には、「最期の場所という思い」「これまでの生活との訣別」という高齢者の持つ要素があった。そして、「看取り」「意思決定支援」「コミュニケーション」「人とのつながり」という支援と、これに関わる「医師」「外来看護師」「訪問看護師」「介護職員」「サ高住の開設経過年数」という要素があった。

### 2. 【新たな生活の場でも自分らしくいたい】

入居者は、今までの生活習慣のまま新たな住まいであるサ高住へ入居する(東海林, 蓮野, 阿部, 2020)。そして、〈入居者は、みんなに支えられて生きていると感じ、自分の命が残り少ないと感じる中、今を一生懸命に生きていこうとしていた〉(伊藤, 沖中, 2018)。

〈入居者は、住み慣れた自宅で生活したい、自宅の整理をして子どもたちに迷惑をかけたくないという思いがあった〉。入居者自身がかつての住まいで守ってきた家庭内役割を喪失しないように、外泊という手段が選択されていた。このために、理学療法士や介護職員は外出時の活動性を維持・促進する支援を行っていた。そして外泊時のサ高住で支援ができない部分は、家族の協力を得られることで解決していた(今井, 中森, 木ノ下, 山村, 2020)。

また、〈入居者は、趣味活動の再開やレクや手芸教室で指導者として教える役割を獲得したことで、サ高住で

の生活スタイルが変化し、意欲的になり他者との交流機会が増えた〉(五十嵐, 川上, 諏訪, 川北, 2019)。〈入居者は、これまでの人生経験が今の自分の支えになっていると感じ、他者のために今の自分にできることがしたいと思っていた〉(伊藤ら, 2018)

〈入居者は、自立して生きていきたいと感じており、サ高住で一人で暮らす上での身の安全と健康への安心の確保を考えていた〉(伊藤ら, 2018)。訪問看護による遠隔看護システムの導入は、〈入居者は、医療との連携を感じることで看護師に親密さを感じ安心を得ていた〉。さらに、看護師と介護職員の教育的関わりから、介護職員も症状を把握できるようになり入居者は安心して自分らしく過ごしていた(菊地, 照井, 鹿内, 福田, 柿山, スーディ神崎, 2016)。

このカテゴリーの構成要素には、「健康」「役割」「慣れた自宅で使用していた物」「これまでの人生経験」「生活スタイルの変化」という高齢者が持つ要素があった。そして、「外泊」「訪問リハビリ」「趣味活動」「他者との交流」「医療との連携」という支援と、これに関わる「理学療法士」「作業療法士」「介護職員」「訪問看護師」「家族」という要素があった。

### 3. 【今までの生活を取り戻したい】

作業療法士や理学療法士は活動性を向上させる支援を行っていた。そして、入院時よりサ高住での生活を見越して関わっていた(中村, 喜多, 須藤, 2022)。

比較的自立した入居者にとって歩くことは生活する上で必要だった。自宅の環境では移動動作が困難になり歩行機能が低下していたが、サ高住のバリアフリーという機能や、介護職員など支援者の存在により、〈自宅と比較してサ高住に退所した利用者の方が移動能力が高い〉(洞口, 柳瀬, 法山, 宮原, 2021)、〈自立度が高い入居者ほどQOLも高い〉(加藤, 小池, 増田, 青田, 2018)状況があった。

このカテゴリーの構成要素には、「環境の変化」「QOL」「移動能力」という高齢者が持つ要素があった。そして、「歩行訓練」「不安の解消」という支援と、これに関わる「ケアマネジャー」「介護職員」「家族」という要素があった。

### 4. 【食事や栄養に関する心配事・困りごとを解決したい】

〈管理栄養士は、入居者の毎日の食事で栄養改善をはかるとともに、入居者が興味をつように故郷の名物料理も取り入れて、家族を巻き込み、食事を楽しむ時間を作っていた〉(阿部ら, 2019)というように、食事を楽しむを持つことも支援には欠かせなかった。このために、食事をどこで行うかということや(細山田, 2018)、咀嚼機能を評価する(Tanaka J, Mukai, Kakudo, Tanaka M, 2015)ことも解決するための支援につながっていた。

このカテゴリーには、「食欲」「食事の楽しみ」「咬合支持」「嚥下機能」という高齢者が持つ要素があった。

そして、「栄養改善」「薬の調整」「食事の提供場所」という支援と、それに関わる「管理栄養士」「薬剤師」「家族」という構成要素が見られた。

#### 5. 【自分の意思で選択しながら自由に暮らしたい】

まず、入居するサ高住を選択することが、大きく影響していた。この選択には、自分の望む生活や環境、また家族との兼ね合いが関係していた（馬場，2016；馬場，2020；佐藤，2016）。そして、暮らしには人との付き合いや相互扶助的な行為が関連していた（馬場，2020；2016）。また、暮らしの中で自由に嗜好を楽しむことで、過去を思い出す時間になり、リラックス効果も得られていた（藤原，森川，2021）。

このカテゴリーには、「楽しみ」「自己実現欲求」「生活スタイル」という高齢者が持つ要素があった。そして、「安心」「相互扶助」「コミュニケーション」という支援、それに関する「住宅設備」や「生活サポート」「緊急時対応」という要素があった。

#### 6. 【親子で安心した生活を送りたい】

高齢者が介護を行うことに不安がある場合、〈住み慣れた地域で暮らしを継続するために親子でサ高住への入居することが高齢なため介護に不安を抱える母親への支援となった〉。また、家族が安心できるように入居後の生活の不安を取り除く支援が行われていた（富田，2022）。

このカテゴリーには、「高齢な親が子を介護する」という高齢者の持つ要素があった。そして、「不安への支援」とそれに関わる「介護職員」という要素があった。

## IV. 考 察

サ高住に入居する高齢者の支援ニーズとその構成要素を明らかにするために、スコーピングレビューを行った。その結果、【最期までサ高住で過ごしたい】【新たな生活の場でも自分らしくいたい】【今までの生活を取り戻したい】【食事や栄養に関する心配事・困りごとを解決したい】【自分の意思で選択しながら自由に暮らしたい】【親子で安心した生活を送りたい】というサ高住に入居する高齢者が持つ6つのニーズが明らかになった。これらの支援ニーズの構成要素には、まず、高齢者が持つ要素として、①最期の場所という思い、②これまでの生活との訣別、③健康、④役割、⑤慣れた自宅で使用していた物、⑥これまでの人生経験、⑦生活スタイルの変化、⑧環境の変化、⑨QOL、⑩移動能力、⑪食欲、⑫食事の楽しみ、⑬咬合支持、⑭嚥下機能、⑮楽しみ、⑯自己実現欲求、⑰生活スタイル、⑱高齢な親が子を介護するがあった。

そしてそれを支援する要素として、①看取り、②意思決定支援、③コミュニケーション、④人とのつながり、

⑤外泊、⑥訪問リハビリ、⑦趣味活動、⑧他者との交流、⑨医療との連携、⑩歩行訓練、⑪不安の解消、⑫栄養改善、⑬薬の調整、⑭食事の提供場所、⑮安心、⑯相互扶助、⑰不安への支援があった。

これに関連する職種・環境として、①医師、②外来看護師、③訪問看護師、④介護職員、⑤理学療法士、⑥作業療法士、⑦ケアマネジャー、⑧管理栄養士、⑨薬剤師、⑩家族、⑪施設の開設経過年数、⑫住宅設備、⑬生活サポート、⑭緊急時対応があった。

原谷ら（2016）は、入居者がサ高住で生きる覚悟を決めることは、家族との現実に向き合い、扶養意識の社会的変化を受け入れる終末に向けた準備性の具体的な第一歩である述べている。サ高住へ入居する高齢者は最期まで過ごす住まいとしてこれまでの生活と訣別して新たな住まいを選択していると推察しながら関わることが重要である。また、医師や看護師が常駐していないサ高住で看取りを行うためには、地域の医療機関の医師や看護師、訪問看護師との協働が欠かせない。看取りのための連携体制を構築することが【最期までサ高住で過ごしたい】高齢者の安心につながると考えられる。

サ高住で、高齢者は新しい住まいでのライフスタイルに希望を持っており、それを確立しようとしている。小野（2008）は、「高齢者が自己の価値観や過去を抛りどころとして現実検討し、自己の可能性を見出し、それを基盤に自己の目指す生き方を自分自身で選択・決定して行動化し、生き生きとした生活を送れている」と述べている。このため、【新たな生活の場でも自分らしくいたい】【今までの生活を取り戻したい】【自分の意思で選択しながら自由に暮らしたい】を支援し促進する関わりが重要となってくる。そして、【食事や栄養に関する心配事・困りごとを解決したい】ため、専門職が関わることは栄養改善につながり、健康維持ができる。このように、高齢者の心配事や困りごとに合わせてチームづくりを介護職員と地域の多職種で構築することが、高齢者のサ高住での生活を継続することにもつながると考えられる。

今回の結果では、支援者の構成要素に家族も見出せた。サ高住で高齢者が生き生きとした生活を送り最期まで過ごすには、介護職員や医療職だけでなく、家族との関わりも必要であることが明らかになった。

最後に、家族の多様化に伴い、子が親を介護するばかりではなくなっている。本研究でも【親子で安心した生活を送りたい】という、高齢な親が介護するためにサ高住と一緒に入居して、支援を受けるという結果があった。このように、多様な家族の在り方に対応できることもサ高住のメリットになると推察する。

## V. 結 論

サ高住に入居する高齢者は自立した生活をできるだけ長く継続できるよう、【新たな生活の場でも自分らしくいたい】【今までの生活を取り戻したい】【食事や栄養に関する心配事・困りごとを解決したい】というような支援ニーズがあった。このため、高齢者は今までの人間関係や家から離れ、【最期までサ高住で過ごしたい】【自分の意思で選択しながら自由に暮らしたい】【親子で安心した生活を送りたい】という選択から新しい生活の構築を目指していた。

## 謝 辞

本論文の構想にあたり、ご助言いただいた園田学園女子大学 森本喜代美先生へお礼申し上げます。

## 付 記

本研究は滋賀県立大学令和4年度外部競争的資金再チャレンジ支援事業（新井）の一貫として行った。

## 文 献

- ・阿部紗季, 末延竜哉, 吉田亨, 今村俊一郎, 大郷勝三, 平野健二 (2019). 在宅での食欲不振患者に対する低栄養改善 薬剤師との連動による管理栄養士の訪問栄養指導. 日本在宅栄養管理学会誌, 6 (2), 155-158.
- ・Arksey, H. & O'Malley, L. (2005). Scoping studies: towards a methodological framework. *International Journal of Social Research Methodology, Theory and Practice*, 8 (1), 19-32.
- ・馬場康徳 (2020). 高齢期における付き合いと居住継続意向 サービス付き高齢者向け住宅居住者を対象とした探索的研究. 田園調布学園大学紀要, 14, 163-187.
- ・馬場康徳 (2016). サービス付き高齢者向け住宅居住者の居住継続意識. 立正社会福祉研究, 17 (1-2), 79-88.
- ・藤原理香, 森川千鶴子 (2021). サービス付き高齢者向け住宅で生活する後期高齢者の香りに対する嗜好の有様. 日本看護福祉学会誌, 26 (2), 153-161.
- ・橋野結花 (2018). A 氏の高齢者住宅での看取りを通して考える, 外来・在宅医療に携わる看護師の役割 地域ネットワーク構築に向けて. 看護と介護, 44, 20-21.
- ・洞口美樹, 柳瀬克典, 法山徹, 宮原謙一郎 (2021). 介護老人保健施設からサービス付き高齢者向け住宅と自宅に退所した利用者間の比較. 理学療法とやま, 33, 58-63.
- ・原谷珠美, 佐々木由紀子 (2016). サービス付き高齢者向け住宅入居者の終末にむけた準備性. 日本看護学会論文集: 在宅看護, 46, 11-14.
- ・細山田洋子 (2018). サービス付き高齢者向け住宅の給食システムと食事サービス. 地域ケアリング, 20(5), 52-55.
- ・五十嵐満哉, 川上直子, 諏訪勝志, 川北慎一郎 (2019). 高齢者複合施設における訪問リハビリテーションの関わりにより活動範囲が拡大し, 社会参加及び役割の獲得を図れた一事例. 石川県作業療法学会誌, 27 (1), 11-16.
- ・今井啓介, 中森清孝, 木ノ下優子, 山村智江 (2020). 通所・訪問リハビリの特色を活かした作業療法によりサービス付き高齢者向け住宅から定期的な自宅外泊が可能になった症例. 石川県作業療法学会誌, 28, 26-29.
- ・伊藤詔子, 沖中由美 (2018). サービス付き高齢者向け住宅で生活している高齢者の「生きがい」. ホスピスケアと在宅ケア, 26 (1), 46-51.
- ・加藤隆三, 小池涼太, 増田高茂, 青田安史 (2018). サービス付き高齢者向け住宅入居者のQOL 向上に向けた施策の検討. 静岡県理学療法士会学術誌: 静岡理学療法ジャーナル, 37, 63-70.
- ・菊地ひろみ, 照井レナ, 鹿内あずさ, 福田大年, 柿山浩一郎, スーディ 神崎和代 (2016). 訪問看護による遠隔看護システムを介した高齢者住宅入居者の在宅支援サービス付き高齢者向け住宅での運用. 日本遠隔医療学会雑誌, 12 (2), 165-168.
- ・国土交通省 (2022). 高齢者の居住の安定確保に関する法律. [https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku\\_house\\_tk7\\_000016.html](https://www.mlit.go.jp/jutakukentiku/house/jutakukentiku_house_tk7_000016.html) (2022年9月28日閲覧)
- ・厚生労働省 (2020). 介護を受けながら暮らす高齢者向け住まいについて. [chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12600000-Seisakutoukatsukan/0000038005\\_1.pdf](chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12600000-Seisakutoukatsukan/0000038005_1.pdf) (2022年9月28日閲覧)
- ・中村理沙, 喜多一馬, 須藤誠 (2022). 拒否傾向の強い認知症高齢者に対する作業療法経験 回復期リハビリ棟から退院後の訪問リハビリまでの一貫した介入. 作業療法ジャーナル, 56 (1), 83-87.
- ・小野幸子 (2008). 高齢者の自我発達の視点から看護援助を考える. 老年看護学, 12 (2), 17-22.
- ・富田健一 (2022). HIV 関連神経認知障害 (HAND)

- HIV 陽性者への在宅サービス調整一事例 HIV 陽性者の福祉サービス利用に関する社会的課題. 認知症ケア事例ジャーナル, 14 (4), 311-319.
- ・友利幸之介, 澤田辰徳, 大野勘太, 高橋香代子, 沖田勇帆 (2020). スコーピングレビューのための報告ガイドライン日本語版: PRISMA-Scr. 日本臨床作業療法研究, 7, 70-76.
  - ・佐々木由紀子, 合田恵理香, 高儀郁美 (2019). サービス付き高齢者向け住宅に勤務する介護責任者およびケアマネジャーの看取りに向けた準備性. 日本医療大学紀要, 5, 3-14.
  - ・佐々木由紀子, 原谷珠美 (2016). サービス付き高齢者向け住宅に勤務する介護職員の終末・看取りに向けた準備性. 日本看護学会論文集: ヘルスプロモーション, 46, 144-147.
  - ・佐藤裕二 (2016). サービス付き高齢者向け住宅の現状と課題. 医療福祉研究, 10, 41-54.
  - ・東海林藍, 蓮野敢, 阿部薫 (2020). 通所型および入居型高齢者施設における利用者の履物調査. 日本整形靴技術協会雑誌, 5, 15-18.
  - ・杉本健太郎, 柏木聖代 (2021). 医療職配置のないサービス付き高齢者向け住宅の介護職員が捉える入居者・家族が満足する看取りに寄与する要因. 日本在宅看護学会誌, 9 (2), 20-30.
  - ・Sugimoto, K., Ogata, Y., Kashiwagi, M., Ueno, H., Yumoto, Y. & Yonekura, Y. (2017). Factors associated with deaths in 'Elderly Housing With Care Servis' in Japan: a cross-sectional study. BMC Palliative Care, 16(1), 58.
  - ・Tanaka, J., Mukai, N., Kakudo, M., Tanaka, M. (2015). Oral health status and food modification for the elderly with low level of care needed in the service-added homes for the elderly. Oral Science in Japan, 2015, 71-74.
  - ・戸谷幸佳, 梨木恵実子, 吉田恭子, 内田陽子 (2020). 高齢者向け住まいにおける ACP 支援 EOLC パスの開発と有用性 実施率と必要性の検討. 群馬保健学研究, 40, 8-17.
  - ・山路聡子, 飯田苗恵, 齋藤基 (2021). サービス付き高齢者向け住宅における訪問看護師のアドバンス・ケア・プランニングに関する看護実践. 群馬県立県民健康科学大学紀要, 16, 3-17.